

書画会の盛況に見る大正期漢詩人の雅交

——喜多橋園宛田邊碧堂書簡十八通紹介——

池澤一郎

田邊碧堂^{たなべしやう}。元治元年（一八六四）十二月十三日に生まれ、昭和六年四月十八日に没す。六十八歳。碧堂は号で、名は華。通稱為三郎。備中岡山の人。病弱のため学を廃し、早くから漢詩と書画とに親しむ。初め政界進出を試み、明治三十一年（一八九八）に憲政党から衆議院議員となる。明治三十六年（一九〇三）まで二期衆議院議員を務める。政界では霞山公近衛篤磨の知遇を得て、中国問題に関心を寄せる。政界から離れた後、日清汽船会社を設立、後に大東汽船社長、日清汽船監査役、大東文化学院教授、藝文社顧問などを歴任し、晩年は漢詩と南画との普及に挺身する。墓は多磨霊園に現存する。衆議院議員時代に出会った五峰坂口仁一郎とともに、漢詩では森春濤門下の双壁と謳われた。碧堂は若年の頃は、春濤風の艶体詩を事とし、五峰が雄渾な詠史を得意としたのと対照的であったが、大正三年に刊行した『碧堂絶句』を春濤、槐南亡き後の漢詩壇の耆宿国分青厓に見せたところ、完膚無きまでに加朱され、またその朱筆の（ことごとく）が肯綮^{かた}に中^{あた}るものと判断されたために、節を屈して、

国分青厓に師事するようになった。あまつさえ、青厓添削の痕跡を一々反映させた『改削碧堂絶句』を改めて出版する。そのため、青厓の得意とした詠史にも詩境を広げた。春濤没後青厓門下となつてからは、かつての『新文詩』を拠点とする森槐南の詩風に批判的であり、槐南門下の岩溪裳川などとは対立した。もともと青厓の詩風に近かった五峰に対する評価は極めて高く、槐南に師事しなければ、さらに高い境地に達していたであろうとまで極言する。五峰が長篇の古詩を得意としたのと対照的に、碧堂に他の詩体が絶無であったわけではないが、絶句に身命を賭して「絶句碧堂」と自他ともに称した。詩集では七絶が目立ち、画集の題画詩は五絶が中心である。五峰の没後その遺稿の編集に青厓、館森袖海とともに携わった。漢詩集に『碧堂絶句』（大正三年刊）、『題畫百絶』（大正九年刊）、『改削碧堂絶句』（大正十年刊）、『凌滄集』（大正十三年自序）、遺稿集『衣雲集』（昭和七年序刊）があり、画集に『碧堂先生山水畫冊』（大正十五年刊）、『碧堂先生畫觀』（昭和三年刊）がある。

一方、本稿で紹介する碧堂の書簡の宛先である橘園喜多貞吉もまた明治大正昭和三代にわたって活躍した漢詩人であり、実業会にも関係し、濱口容所、土方久元、和田豊吉等名士の漢詩文集や伝記の編纂出版にも携わった。後に触れる『東山莊唱和集』（明治四十二年刊）の信夫恕軒の序文に「門下の喜多貞」とあるので漢学の師は信夫恕軒であったことが分る。詳細は不明である。併し、歴史学の泰斗喜田貞吉博士に「橘園喜田貞吉」という文章（大正十年十一月、十二月『民族と歴史』、『喜田貞吉著作集』第十三卷、平凡社、昭五四年に再録）があつて、喜多博士が処々で橘園と誤認せられる体験を語り、橘園が紀州の人で、明治四年生まれであると記されている。

近時、筆者の蔵に帰した田邊の書簡十八通を紹介するに先立ち、碧堂の山水画集である『碧堂先生畫觀』から、青厓の題詩二首と碧堂自跋とを紹介する。

国分青厓の画集題詩は、無造作に葉書に認められたものをそのまま複写して巻頭に掲げる。第一首を各句行替へして示す。

辨香太白與昌齡 香りを辨つ 太白と昌齡と
誰道清音輕性靈 誰か道はんや 清音の性靈を軽んずると
刻劃雲煙猶不足 雲煙を刻画するも猶ほ足らず

更將餘力及丹青 更に餘力を將て丹青に及ぶ

起句は李白と韓愈との詩風の違いを弁別しようとするような精妙な詩眼を碧堂が備えていることを言う。承句は「清音」＝碧堂の詩が決して清新性靈派のような率直かつ艶冶な作風を退けるものではないと

いうのであろう。承句の含意する所は深い。碧堂が現在は格調派と目される青厓に師事しているが、かつては森春濤、槐南の艶冶な詩風を奉じたことを言い当てるからである。

転句、「雲煙を刻画する」というのは、花鳥風月を詩句に搦めとることで、詩作を意味する。結句では漢詩制作では満足できずに、更に山水画の制作に碧堂はいそしんでいると指摘する。軽い揶揄のニュアンスが籠められているであろう。葉書の左隅には「贈碧堂」「青厓山人」とある。朱印で「青厓」。続いて第二首には次のようにある。

詩畫雙優今世無 詩画双つながら優るるは今の世に無し

草堂日見墨痕濡 草堂 日々墨痕に濡るるを見る

胸中幾許藏丘壑 胸中 幾許か丘壑を藏し

吐作雲煙萬疊圖 吐きて雲煙萬疊の図を作す

一首目には多少の皮肉が籠められていたが、こちらは詩画双絶の碧堂を賛美する題詩の機能を十全に果たしている。

続いて、同じ画集の碧堂跋文を見る。ここには碧堂の絵画観が端的に述べられている。本稿で紹介する一連の喜多橘園宛書簡の中で、尤も注目すべきが大正六年初頭、下関門司で開催された碧堂の書画会の模様を伝える大正六年一月十九日と二月二十六日との書簡である。そこに述べられているように、即席で書画を制作し、それを来会者に即売するといったような集まりが開催され、それが小さからぬ規模を有したということは、近世後期の頼山陽、大窪詩佛、梁川

星巖といった漢詩人たちが一度書画会を開催すると、百兩単位の金子が動いたという書画会の盛況が、大正期に至っても未だ衰えていなかったという点を知らしめる点で、漢詩文の盛況は江戸時代の終焉と運命を共にしたといったような歴史上の事実を文書で確かめない観念的な歴史家の偏見を払拭するに足るという意味でも興味深い。南画の復興を提唱した碧堂は、右に挙げた二つの画集がそれぞれ五十点づつ題画詩を添えた山水画を収録するの他にも、今も時折、美術商が二束三文の値を付けて店頭にぶら下げるほどにもあまたの書画を制作したのであるが、その碧堂の絵画観がこの跋文に披瀝されるごとく、恬淡たるものであったということには一驚を喫する。それが文人の精神に特徴的な自己抑制というものであるうか。

予素以詩爲命。近又以畫忘老。範水摸山。搜奇問勝。一毫一硯。好爲千里之游。于臺于燕。不知雙脚之繭。春來家居。乘興畫山水五十幀。未敢云稱意。然半歲精力所注。鷄肋不忍棄去。乃欲舉而叩諸公評論。蓋聞京攝之地。久稱藝術淵藪。士人好古。尤精鑑裁。意竊鄉往焉。幸有池戸高山堂土橋永昌堂之慇懃。擬以冬初展觀於浪華。顧予畫笨拙。不過詩翰餘技。慕倪黃之高遠。學沈董之蒼潤。聊亦欲尋前賢之遺緒。並發胸中之逸氣耳。温故未到。知新更難。倘蒙諸公不棄。勿吝一言之教。則予之所厚望也。

昭和三年戊戌九月於東京僑居田邊華

予素より詩を以て命と爲す。近ごろ又た画を以て老いを忘る。水を範とし山を摸し、奇を搜り勝を問ふ。一毫一硯もて好んで千里の游を爲す。臺に于いて燕に于いて、双脚の繭るるを知らず。春來家居し、興に乗じて山水五十幀を画く。未だ敢へて意に称ふとは云はず。然れども半歳の精力の注ぐ所、鷄肋なるも棄て去るに忍びず。乃ち挙げて諸公の評論を叩かんと欲す。蓋し聞くならく、京撰の地、久しく藝術の淵藪と称せらる。士人、古へを好み、尤も鑑裁に精し。意窃かに郷往す焉。幸に池戸高山堂・土橋永昌堂の慇懃有り。冬初を以て浪華に展観せんと擬す。顧ふに、予が画、笨拙にして、詩翰の餘技に過ぎず。倪黃の高遠を慕ひ、沈董の蒼潤を学び、聊か亦た前賢の遺緒を尋がんと欲す。並びに胸中の逸気を発するのみ。故きを温ぬること未だ到らず。新しきを知ること更に難し。倘し諸公の棄てざらんことを蒙りて、一言之教へを吝むこと勿きは、則ち予の厚望する所なり。

昭和三年戊戌九月於東京僑居田邊華

五十幅の山水画は昭和三年の四月から九月にかけての半年の間に描かれたもので、画集として頒布される前に、大阪で展覧会があったことが右に知れる。この謙抑を事とする跋文は、明晰で特に注するを須いなが、「倪黄」というのは、元末四大家の中の、倪瓚と黄公望との並称である。宋代に完成を見たという中国山水画の頂点はもちろん董源、郭熙といった北宋の画人のものとされるが、いか

んせん伝存する作品は稀少であり、範とするに足りない。異民族支配下の元代ではあるが、そこにあつて宋代からの画統を着実に継承するというのが、この四大家であり、文字通りの文人画の最高峰と目されることは言うまでもない。辛亥革命以後中国山水画の名品が陸續と日本に渡来したというが、この四大家のものはほとんど寓目することは出来なかつたであらう。それゆえに碧堂は「慕」という字を使った。一方、続く「沈董」は、辛亥革命以後真贋取り交ぜて多くの作品が渡日し、現に東京都渋谷区の松濤美術館などに所蔵される明の沈周、董其昌の並称である。これは碧堂も実物に接しえたがゆえに、「學」なのである。

それでは、詩画に身命を賭する後半生を送つた田邊碧堂の心懷が忌憚なく披瀝されている心友喜多橋園宛葉書・書簡十八通を年次順に掲げる。翻字に当たっては、書簡現物の行替えをそのままに翻字した。

一、明治三十九年十月三日付喜多貞吉宛田邊碧堂書簡

表書「東京日本橋區小網町三／濱口家にて／喜多貞吉様／拝復」

裏書「封／備中淺口郡長尾／田邊為三郎／十月初三午下」

本文

「朶雲拝讀愈御涼安

奉恭賀候。容所兄

之山莊吟にハ小生も和なか

るべからずとハ、兼々思居候
得共、近來殊に俗忙

从田久しく無之候て、詩

戈耗了曠日仕居候。御

來示に鼓舞されて一番

勇氣出し可申乎。呵々。

拙筆御下命御愧く

存候得共、モ一今更字を

習て上手になる程の

元氣もなく、御求の儘に

塗鴉送上仕候。御晒

爲可被下候。汗顔々々。小生

今月末にハ上京可仕候。

拝禮相樂候。草々頓首

十月初三偶在家

爲三郎

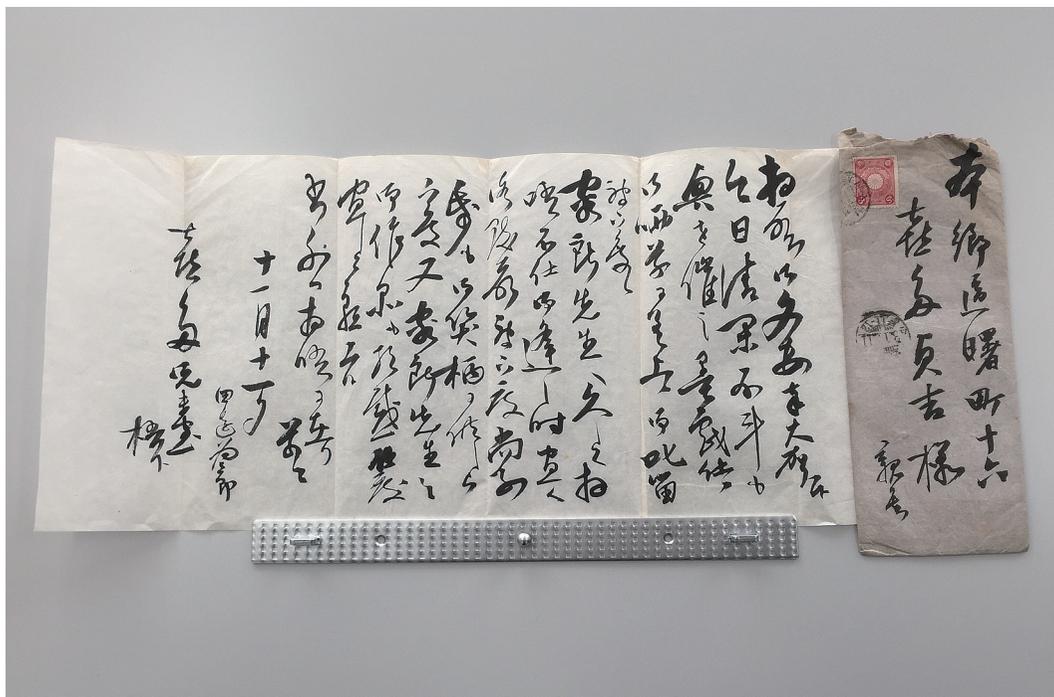
喜多兄臺

梧下」

封筒宛名の「日本橋小網町三濱口家」は喜多が後に書画の縮印を
含む遺稿集『容所遺韻』（大正四年刊）を編む容所、九代浜口吉右
衛門（一八六二～一九一三）の居所のことと思われる。浜口は紀州
有田郡の人で、ヤマサ醤油の関東最大の出荷先の当主、九代広屋で

あり、広屋は小網町に在った。浜口は衆議院議員も務めたから田邊は議員時代から付き合いがあったのであろう。喜多橋園は、何か浜口を補佐するような仕事に住込みで従事していたのであろうか。手紙本文の「容所兄」は浜口その人である。容所は漢詩も嗜んでいるから、「山莊吟」というのは漢詩の詠で、碧堂は「和なかるべからず」といって、次韻などの唱和を試みたいとは思っても多忙故ななか果たせないと云っているであろう。「山莊」はあるいは、次の書簡で言及される「東山莊」のことかも知れない。さすればこれは和歌山県広川町の浜口家邸宅御風樓の南に広がる「東園」とは別に、容所が猪狩りの拠点とした和歌山県有田郡津木村にあった「東山莊」であろう。浜口容所は「東園」に榮え有らしめるために『東園十二勝詩画冊』を作成（『斯文』第二二六号、二〇一五年刊、村山吉廣「浜口容所『東園十二勝詩画冊』―近代日本庭園文学の一つとして―」）しており、その詩画集作成のために諸名家の詩を募っていた。

二、明治四十二年九月四日付喜多貞吉宛田邊碧堂書簡
表書「東京本郷區／曙町十六／喜多貞吉様／侍史」
裏書「封 九月四日／（陽刻朱印） 備中國玉島／字狐島別墅／田邊為三郎」
本文
「拝啓。爾來御無音仕候。
秋涼相催候處、愈々御
清康奉恭賀候。
東山莊唱和集御
贈与被下、昨來拝讀
快不可道盡、難有
御厚意奉謝候。小生
先日中上京仕居、此
頃歸莊、爲之に御
禮延引仕候。
容所兄にも久しく御
疎曠仕居、御晤時
宜く御致聲可被下候。
先は乍延引
時下御自愛是祈
草々頓首



【写真イ】

九月四日

田邊爲三郎

喜多兄臺

梧下

文中にある『東山莊唱和集』は前便で碧堂も寄詩を求められたもので、この明治四十二年に刊行されたことが確認できる。

三、明治四十三年十一月十一日付喜多貞吉宛田邊碧堂書簡【写真イ】

表書「本郷區曙町十六／喜多貞吉様／親展」

裏書「封十一月十一日夕／（以下印刷）東京赤坂區青山高樹町十二

番地／田邊爲三郎／電話芝四七四番」

本文

「拝啓御文安奉大賀候。

今日清閑不計も

興を催候て墨戲仕候。

御晒草に呈上候。御叱留

被下度候。

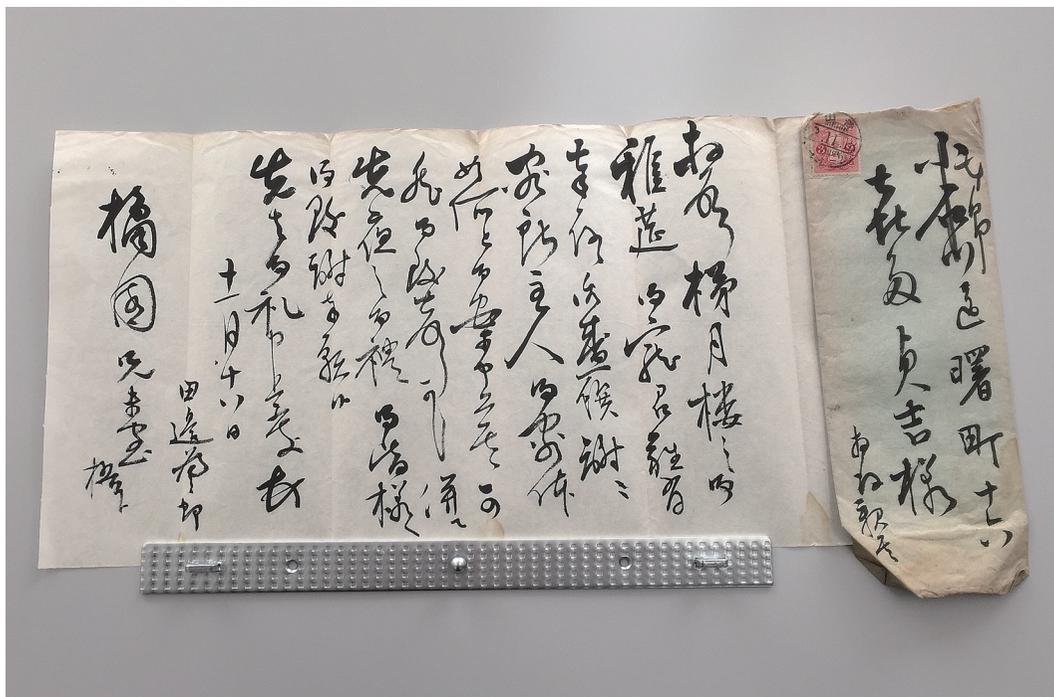
容所先生へ久しく拝

晤不仕、御逢之時宜く

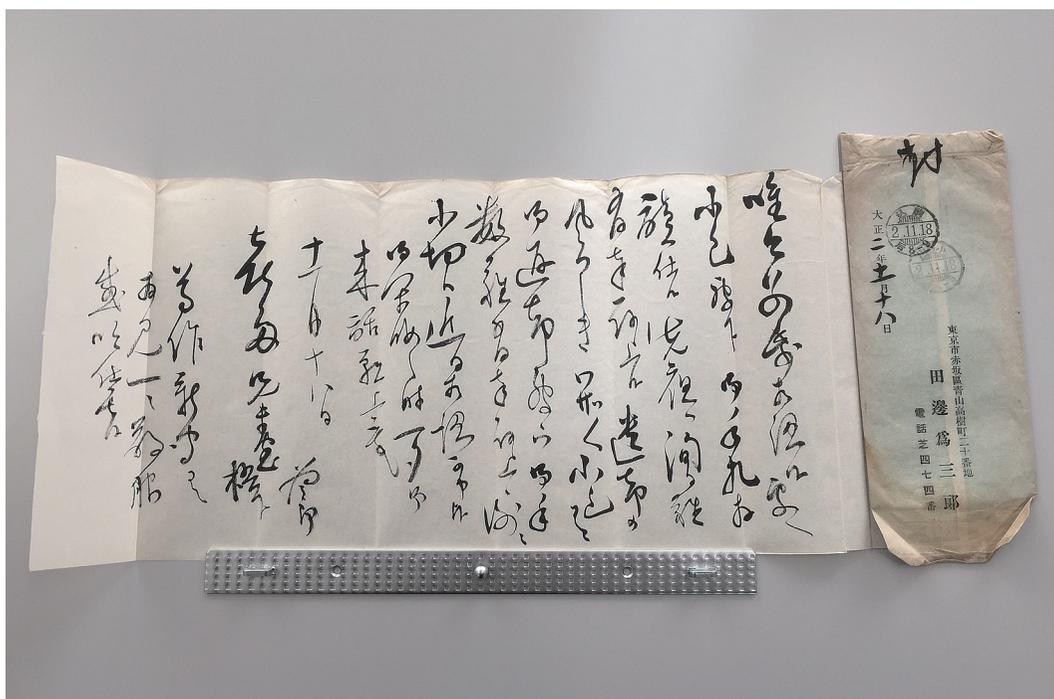
御致聲被下度、尚別

昏も御笑柄に供し被

下度、又容所先生之



【写真口】



【写真八】

御作品も拝感仕度

宜しく願上候。

書外ハ拝晤に在り

草々

十一月十一夕

田邊爲三郎

喜多兄臺

梧下

文中の「墨戯」とは、恐らく画のことであろう。喜多に呈上するのみならず、喜多が恩顧を蒙っている浜口にも喜多から別紙の作を差し上げて欲しいと言っているわけである。その後で浜口の作を碧堂は見たがっているのだが、これも画であろう。『谷所遺韻』には野呂介石を範とする完成度の高い容所の山水画が縮印されている。碧堂の画は精密な筆致でしたためられるが、速成の筆であったことである。この書簡には封筒も併存するが、「別昏」の画は逸している。

四、大正二年十一月十八日付喜多貞吉宛田邊碧堂書簡【写真口】【写真ハ】

表書「小石川（見せ消ち）本郷區曙町十六／喜多貞吉様／拝致親展」

裏書「封／大正二年十一月十八日／（以下印刷）東京赤坂區青山高

樹町十二番地／田邊爲三郎／電話芝四七四番」

本文

「拝啓。梯月樓之御

雅庭御寵召難有

奉存候。御盛饌謝々。

容所主人御容躰

如何と御案申上居候。可

然御致聲可被下候。併て

先夜之御禮御皆様へ

御致謝奉願候。

先は御礼申上度頓首

十一月十八日

田邊爲三郎

橘園兄臺

梧下

同封別紙書簡本文

「唯今別昏相認候處へ

小包被下、御手札拝

讀仕候。先夜ハ洵に難

有奉存上候。遺却の

風ろしきワザく小包にて

御返却被下御手

數難有奉存上候。謝々。

小切ハ近日相認可申候。

御閑暇之時、一夕御

來話願上度候。草々

十一月十八日

爲三郎

喜多兄臺

梧下

尊作新聞にて

拝見一々敬服

感吟仕居候」

文頭の「梯月樓之御雅苑」とは、浜口容所が、毎年柳橋梯雲楼で開催していた中秋の月見の酒宴のことである。この観月宴に集った諸家の吟詠（漢詩・和歌）を集成した『梯雲取月集』は、喜多橘園によって編まれており三集までが出版されている。後文にあるように、この年容所は病を啣っていたので、主催者を欠いての宴であったか。喜多は宴の一切をとりしきっていたごとくである。碧堂は、喜多に容所の容態を尋ねているが、この後ひと月足らずの十二月十一日に容所は他界する。「小切」は喜多が碧堂の画を求めたので、近日中に描くと答えたものであろう。末尾に喜多の漢詩が新聞に頻繁に掲載されることを慶賀している。

五、大正三年五月六日付喜多貞吉宛田邊為三郎書簡

表書「本郷駒込曙町十六／喜多貞吉様／侍史」

裏書「大正三年五月六日／（印刷）東京市赤坂青山高樹町二十番地

／田邊為三郎／電話芝四七四番」

本文

「拝啓。愈御文安奉賀候。

平生ハ御無音奉謝候。

昨秋御預り仕候小絹大に

延引今日漸く一揮仕候。

御晒取之上、濱口兄へ御

送り被下度願上候。

尊作時々御報知奉願候。

絶句之作家方今特に

大兄に於て超凡を認め傾

倒可仕に深く御坐候。頓首

五月六日

田邊為三郎

橘園大兄

梧下」

「浜口兄へ御送り」とある「浜口」は九代吉右衛門容所ではないとすると十代目か。容所没後もその遺稿集編纂のこともあって、喜多と浜口家との縁は疎くはならなかった。末尾で「絶句の碧堂」が

「絶句之作家」として橘園に嘱望しているのが注目される。

六、大正三年十月廿一日付喜多橘園宛田邊為三郎書簡

表書「本郷區駒込曙町十六／喜多貞吉様／侍史」

裏書「大正三年十月廿一日夕／（印刷）東京市四谷區須賀町二番地

／田邊為三郎／電話番号七四四番」

本文

「拜啓。愈御壯安奉賀候。

平生御無音多罪々々

先日統本御送り詩畫

被微拜承仕りながら、疎

嫚今に御返事も不仕、失

禮奉謝候。然るに勝手の事

願上候得共、別昏へ御旧作

にて宜れば（なるべく）（可成は松とか青山とかの

詩目出かりそふな詩を）御認

被遣度、星嶋老人八十

壽の爲と御落款被下候得ば

更に難有奉存候。國の友人

の父明春八十之由に付三

五の詩友に舊作にても御認め相

願て贈り遣れ度タメニ御坐候。

先日阿南行坂先生に御逢

之由、畫風韻致に富み

温藉之處、宛然華人

と小生ハヒドク感心仕居候。

先は御願申上度、時下御

自愛被為成度候。頓首

十月二十一日

為三郎

橘園先生

梧下

昨日の中外商業詩欄へ

尊作頂戴仕可申候」

冒頭、碧堂が詩画を荏苒として「統本」にしたためられず、その

債を負ったまま、今度は郷土岡山の知人の八秩を祝賀するために、

喜多に寄詩を懇願、落款の指示までしている。「御旧作」でも構わ

ないと言う所に文雅の人の抑制がある。詩文の雅交も、こうなると

随分窮屈な印象があるが、近世中期以来、漢詩人間の交友にはこう

した側面も存したのである。末尾の中国人の氣風があると讃えら

れている画人「阿南行坂」のことは知らない。博雅の示教を乞い奉

る。末の「中外商業詩覽云々」とは、その当時碧堂が選者を担当し

ていた日本中外商業新聞（現在の日本經濟新聞）の漢詩欄に喜多の

作を載せたということである。

七、大正三年十月二十三日付喜多貞吉宛田邊為三郎書簡

表書「本郷區駒込曙町十六／喜多貞吉様／拝復」

裏書「封／大正三年十月廿三日夕／（印刷）東京市四谷區須賀町二

番地／田邊為三郎／電話番町七四四番」

本文

「拝啓。早速に御詩作り被下、

嘸本人大喜可仕、小生も御礼

申上候。御懇に任せ愚見加

筆仕書候。御取捨可被下候。○毎々

御尋被下候由之處、不在失

礼仕候。此節ハ日々外出仕候

故、夜分（明夕ハ外出）御話に

御出被下度願上候。朝ハ九

時迄ハ在宿仕候。

其内拝晤可申陳候頓首

十月二十三日夕

為三郎

喜多先生

梧下」

前便から二日後の日付だから、前便で碧堂が依頼した郷里の「星

嶋老人」の八秩を祝賀する詩を喜多が早速作って寄こしたのだと分

かる。喜多は碧堂の意の存する所を察して、「舊作」ではなく、新たに詩を賦したのであろう。喜多が是非にとこの新作の添削を懇望したらしく、碧堂はその祝賀詩の部分的改案を記した別紙を寄示したごとくである。

八、大正三年十一月十二日付喜多貞吉宛田邊碧堂葉書

宛名「本郷區駒込曙町／十六／喜多貞吉様」

差出人「田邊為三郎／四谷須賀町／十一月十一日夕」

本文（裏書）

「拝復御文安奉大賀候。從仰今日左の

如く構思仕候。

故人天上梯明月。此去一年終不回。

金桂花開何處碎。碧雲萬里碧樓臺。御正斧可被下候。

御送りの糺小切、他々參居候者と混じ候が

寸法何程の分なりしか一寸御知らせ被

下度ソノ分へ可相認候草々」

これまで、詩文の依頼や詩債を果たせぬ詫びなどの文言が見えるばかりで、具体的な作品が引かれることはなかったが、ここでは七絶が一首引かれている。

故人天上梯明月 故人天上 明月に梯し

此去一年終不回 此より去つて一年終に回らず

金桂花開何處碎 金桂花開いて 何れの処にか碎けたる

碧雲萬里碧樓臺 碧雲万里 碧樓台

起承句で詠じられている内容から、本詩はどうかやら浜口容所の一周忌のための作であることが知れる。月の縁語として転句で「金桂花」＝キンモクセイが詠じられているが、この可憐にして濃厚な香りを放つオレンジ色の小花は、まことに「碎」と形容すべき散り方をする。これも容所の一年前の他界を暗示するであろう。結句は知人が冥界という手の届かない遠方に行ってしまったことを詠嘆する。漢詩人間における頻繁な詩文のやり取りにあつては、この葉書の末尾のごとく、詩画をしたためるための詩箋や絹本が依頼した当人用のものでないものと混在してしまうこともしばしばあつたのである。いかにも雅中の俗といった趣きがあつて興味深い。

九、大正五年九月十六日付喜多貞吉宛田邊碧堂書簡

表書「府下瀧の川巢鴨／元駒込／喜多貞吉様／恵展」

裏書「封／九月十六日／（陽刻朱印）東京四谷區須賀町二番地／田邊為三郎」

本文

「拝啓。先夜ハ御寵

意御送行之清筵

被爲張被下難有

奉感佩候。近來になき

愉快之事にて永く

難忘得候。早速に御禮

書可差出之處、頗る多

忙意外に延引奉

謝候。小生出發ハ廿三四

日迄延引仕候。右は安川

翁上京其話にナルコトナラ

自分歸宅之時に來遊

更にぬし云々モトヨリ日

柄あつてにも無之故數日

猶豫仕候。

書外ハ拜晤に在り頓首

九月十六夕

為三郎

橘園兄臺

梧下」

橘園が碧堂の為に壮行会を開いたことへの礼状である。本稿の眉目である碧堂の九州一円での書画会の盛況を報ずる書簡は、大正六年の正月と二月とのものである。それ以前にも近畿や瀬戸内などにも立ち寄り、門司の後には佐世保、長崎などを廻る大旅行であつたとすれば、九月の段階で早々に壮行会が開かれるのも不自然ではない。

次に掲げるのが、門司での書画会の宣伝ビラとその盛況ぶりを伝

える碧堂書簡である。

十、大正六年一月十九日付喜多貞吉宛田邊碧堂書簡【写真二】【写真一】

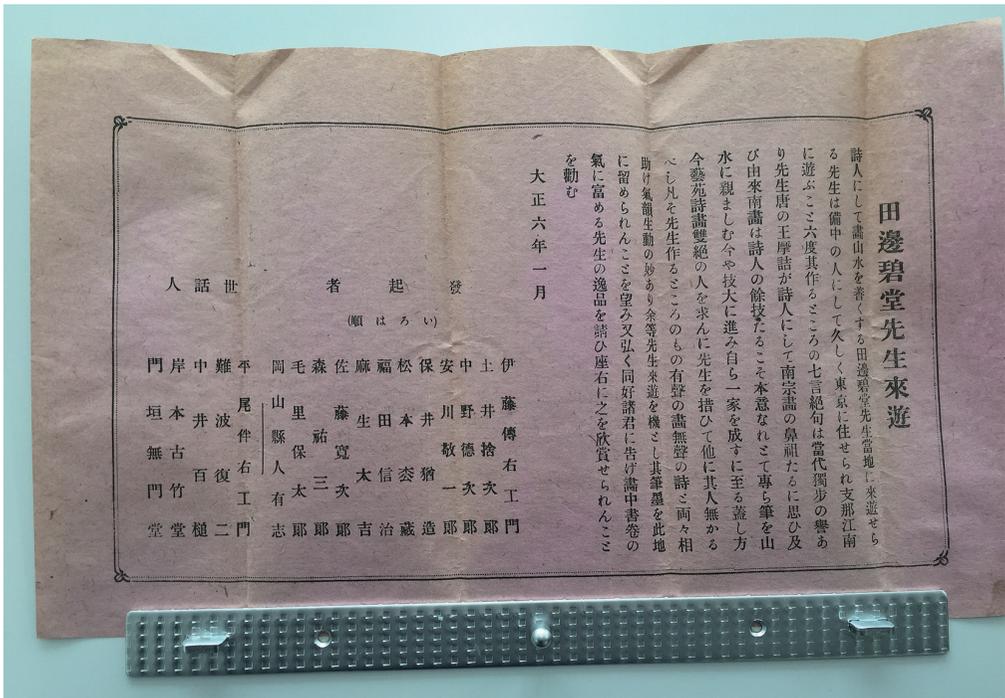
真本

表書「東京市外西ヶ原六十六／喜多貞吉様 拝復」

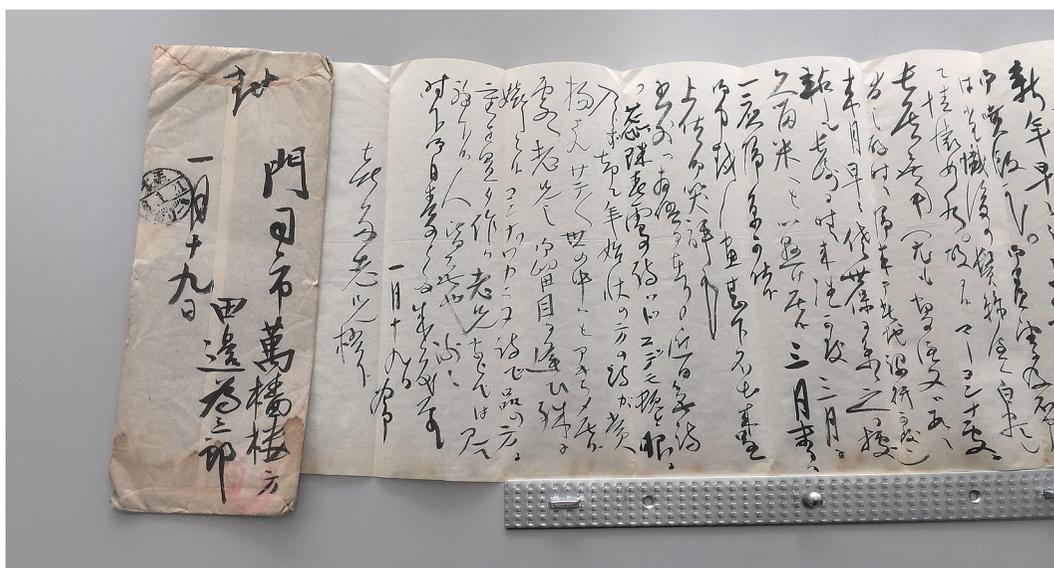
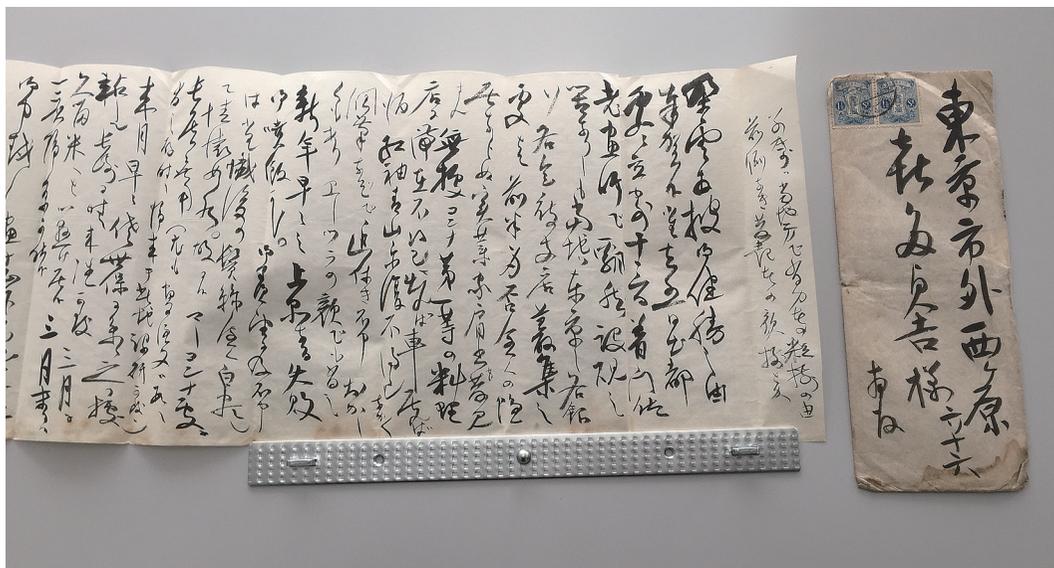
裏書「門司市萬橋楼方／田邊為三郎／一月十九日」

添付書類（印刷）「田邊碧堂先生來遊／詩人にして畫山水を善くする田邊碧堂先生當地に來遊せらるる先生は備中の人にして久しく東京に住せられ支那江南／に遊ぶこと六度其作るところの七言絶句は當代獨歩の譽あり先生唐の王摩詰が詩人にして南宗畫の鼻祖たるに思ひ及び由來南畫は詩人の餘技たるこそ本意なれとて専ら筆を山／水に親ましむ今や技大に進み自ら一家を成すに至る蓋し方／今藝苑詩畫雙絶の人を求め先生を措マツひて他に其人無かるべし凡そ先生作るところのもの有聲の畫無聲の詩と両々相／助け氣韻生動の妙あり余等先生來遊を機とし其筆墨を此地／に留められんことを望み又弘く同好諸君に告げ畫中書卷の／氣に富める先生の逸品を請ひ座右に之を欣賞せられんことを／勸む／大正六年一月／伊藤傳右工門／土井捨次郎／中野徳次郎／安川敬一郎／保井猶造／松本恣藏／福田信治／麻生大吉／佐藤寛次郎／森祐三郎／毛里保太郎／岡山縣人有志（以上につき「發起人・いろは順」とあり）／平尾伴右工門／難波復二／中井百穂／岸本古竹堂／門垣無門堂（以上につき「世話人」とあり）」【写真二】

書画会の盛況に見る大正期漢詩人の雅交



【写真二】



[写真本]

本文

「 別紙ハ當地方で有力者粒揃の由

前例なき發起者の顔揃とか

朶雲拝披御健勝之由

奉賀候。小生去五日出都

處々立寄十三日着門仕候。

老畫師で飄然設硯之

筈なりしも當地ハ東京之各銀

行各會社支店叢集之

處とて前半身者全くの隠

居ならぬ實業家肩書を發見

され無據コンナ第一等の料理

店に滞在不得已ニ、出れば車、居れば

酒。紅袖青山亦復不得已。なかなか

潤筆などで追付き不申おかし

くもありエーツラの顔でも有之

新年早々之上品なる失敗

御噴飯可被下候。御羨望に及不申

は小生懺悔の鬢絲全く白盡し

て情懷如水。故にはマーコンナ處に

長居ハ無用（尤も畫の注文ハ數々

有之故時々歸來テ此地設硯可致候）

來月早々佐世保に参り之に據

站着長崎に時々來往可致。三月に

久留米へと心懸け居候。三月末ニハ

一應歸京可仕候。

御申越之畫

甚乍不出來呈

上仕候。御笑評可被下候。

書外ハ拜晤に在り。近日無詩。

○蕊疎春雪詩ハドコデモ頓と眼に

入らず。却て年始状の方の詩が賞

揚されサテサテ世の中ハとアキラメ居候

處へ老兄之御留目に逢ひ殊に

嬉しく候。コンナ○ワカラヌ詩で品の方に

重を置夕作ハ老兄ならでは見て

被下候人皆無也。謝々

時下御自愛に被成度候。草々

一月十九日

為三郎

喜多老兄梧下」〔写真ホ〕

次の一通と併せて、書画会の盛況ぶりから喜多との詩話、書画会で儲けた金銭の用途に至るまで、内容豊富で今回紹介する書簡中の

白眉である。冒頭細字でしたためられた追伸は、別紙の薄桃色の碧堂書画会の宣伝ビラが、門司界隈の名士がこぞつて名を連ねたものであることを言う。「全くの隠居ならぬ肩書を發見」とあるのは、本稿冒頭に掲げた碧堂の略歴と対照するとよくわかるが、衆議院議員、各種汽船会社の重役を務めた肩書が既に門司の人に知れ亘つていたことをいう。そのため、高級料亭や宿泊施設を利用せざるを得ず、どこにも出るにも車に乗って廻るので、折角書画会で儲けた金子も散財して、足が出そうな始末だというのである。気苦労で白髪が増えたのだから、豪遊ぶりは憐れんでもうらうべきことで羨望には値しないという文言はふるっている。

豪遊の一端を示唆する「紅袖青山」は宋詩から用例の検出される詩語だが、「青山」は下関の海と山とを指し、「紅袖」は土地の藝妓を指す。酒と美女とが散財の一大原因というわけであろう。門司の後は、佐世保、長崎、久留米と九州各所で書画会を催した模様である。かかる順路の大旅行の企画であったために、喜多は懇ろな壮行会を昨秋九月に催したことが知れる。旅行中にはなかなか漢詩が出来ぬと述べた後に、またぞろ詩に関わる話を喜多を相手にしている点に、「詩を命とした」碧堂の真面目がある。

十一、大正六年二月二十六日付喜多橋園宛田邊碧堂書簡【写真へ】
表書「東京日本橋區小網町／豊國銀行氣付／喜多貞吉様」

裏書「門司市浪花町／萬橋樓方／田邊為三郎／二月廿七日正午」

書簡本文

「拝啓漸く春暖相催候。

愈御文安奉大賀候。今春の

九州の寒さハ如北海道、日々風

雪イヤハヤ驚入候。小生幸に頑

健、門司も存外の好況、先日

佐世保に廿日間参り、是亦頗

ル當り申候。拙技ユエトモ相手ニハ

サレヌ筈ナルモ、幸に東道主到

處に得其人、如此存外の

大當りと相成、不堪恐縮、責任の

重を自覺仕居候。別昏ハ

筆少なにと注文されて二枚

かき試候。其内の一枚也。御

晒草に呈上仕候。○門司の

仕事だけでも到底マダ一ヶ月

ヤソコラニ片付き不申、依て

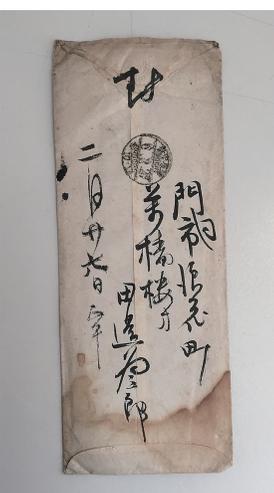
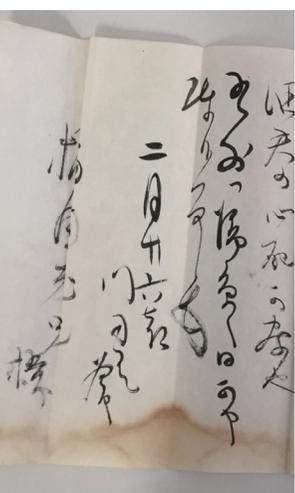
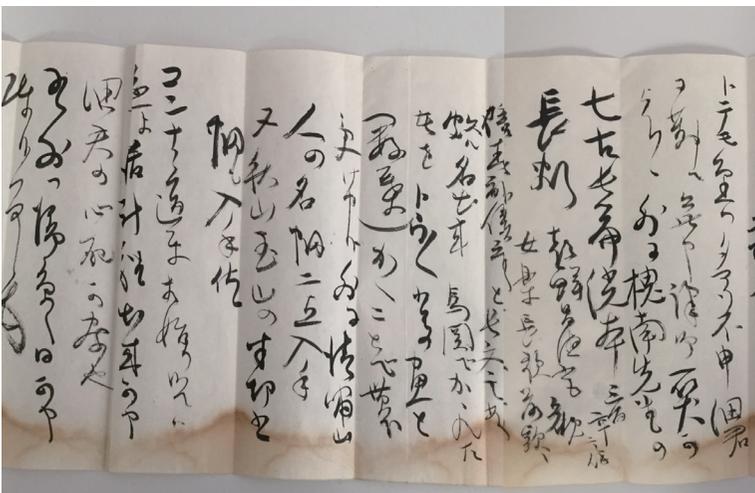
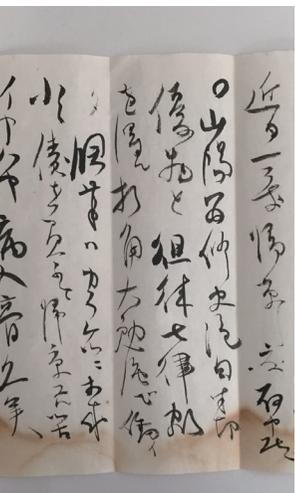
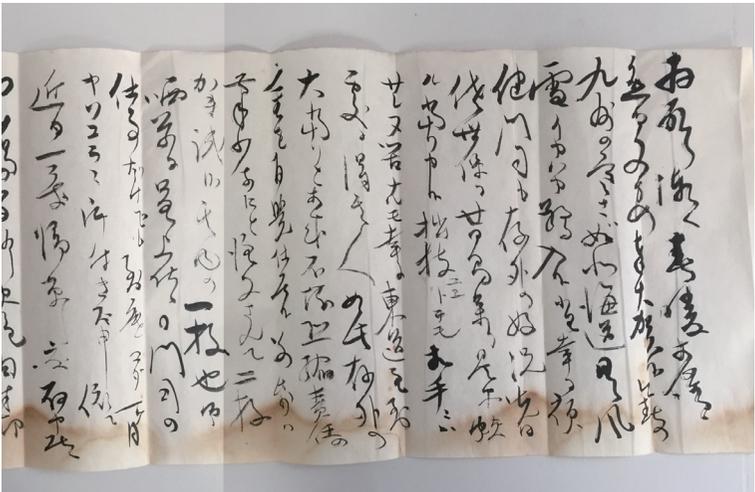
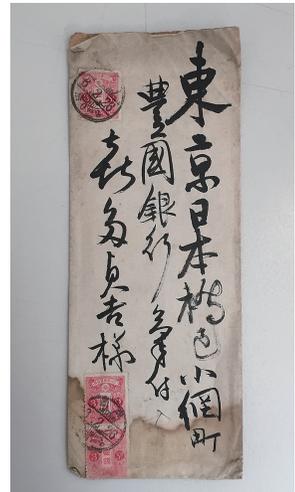
近日一度帰京し度存申居候。

○山陽翁修史絶句半切

優物と徂徠七律額

を得て折角大勉強で働イ

夕潤筆ハカラケツニ相成



【写真へ】

書画会の盛況に見る大正期漢詩人の雅交

小々債を負ふて帰京スル筈

イヤハヤ病入膏久矣

トテモ金ハタマリ不申、細君

に對て無申譯、御一笑可

被下候。外に槐南先生の

七古長篇続本三百六十言餘

長額、朝鮮昌徳宮歛

女楽長歌落款に

陪春畝侯云々と長文もあり、

頗ル名出來 馬關でかゝれた

者をトウくゝ小生畫と

(數葉) かへことで貰ひ

受け申し候。外に情嘯山

人の名幅二点入手

又秋山玉山の半切書

幅も入手仕候。

コンナに道楽相始候テハ

愈よ活計難出來可申

細君の心配可察也。

書外ハ帰京之日可申

陳候。草々頓首

二月廿六朝

門司にて

為三郎

橘園老兄

梧下」

前半は九州一円がこの年「北海道」並みの異常寒波に襲われていることと、九州書画会の巡回開催がすでに佐世保にまで至ったこととを併せ報じる。二十日間に亘る佐世保での開催も盛況であった。どうやら門司を拠点に九州各地を廻つたらしく、自らの書画の需要が門司でもまだ一か月分くらいはありそうだとしている。当時の日本家屋にはことごとく床の間があつて、一定の生活水準の家庭では書画軸の何本かは有していたにしても、現在からは想像も絶するほどに詩文書画が人気を博していたことが察せられる。

注目すべきは後半であり、ここでは前便で高級宿泊施設や交通手段、夜の飲食費、藝者をあげるための費用などで、書画の潤筆料では到底賄いきれぬと報じていたのに関わらず、自らの書画研究、文人趣味を満たすために、九州の地で陸続と近世から明治にかけての書画の名品を収集していることを報ずる。曰く、頼山陽の詠史詩半切、荻生徂徠の七言律詩額、かつての師である森槐南が下関でしたためた伊藤博文に朝鮮で随行した折に賦した長篇の古詩の横長額、情嘯の軸二点、秋山玉山の軸一点などを購入したり、自らの書画と交換したりして、書画会での潤筆料は「カラケツ」になった上に、小々足が出たとしている。その顛末に碧堂の恐妻家の一面がちらつ

くのはご愛敬である。

十二、大正六年八月六日付喜多橋園宛田邊碧堂葉書

宛名「東京市外／瀧の川町西ヶ原六六／喜多貞吉様」

差出人「四谷須賀町／田邊爲三郎」

本文

「田邊華恭欣

橋兄暑安

八月六日（昨日帰京）

其後御無音奉謝候

九州へ帰り数日

之休養之後又々

出羽に参候。羽黒

山にも登り申候平

の将門の逆臣

ならぬ史實を

聞き申候。頓首」

この葉書の消印は判読が出来ず、ために大正六年のものと特定する
ために、碧堂が詩箋にしたための七絶を鑑賞する。

振衣教我立高岡 衣を振るつて我をして高岡に立たしむ

海鶴一聲天水長 海鶴一声 天水長し

爽氣來従月山上 爽氣は月山の上従り来り

酒田萬戸曉蒼々 酒田の万戸 曉に蒼々

丁巳夏日

碧堂生華

漢詩本文に「月山」「酒田」とあるのが、右の葉書に「出羽」「羽黒山」とあるのと照応する。落款の「丁巳」は則ち大正六年であり、書画会を年頭より各地で開催して「九州へ」帰京したのが、ようやく七月末であったことが分かるのである。

十三、大正七年八月三十一日付喜多貞吉宛田邊碧堂書簡

表書「市外西ヶ原六十六／喜多貞吉様／拝復」

裏書「封／四谷須賀町二／田邊爲三郎／八月三十一朝」

本文

「拝復御令嗣御

快癒御退院相成候

御吉報に接、致御

同喜奉恭賀候。一

時之御攢眉も茲に

御開らき被爲成候御仕

合、小生も嬉しく存上候。其

後、時々御尋可申上之

處、御快方と承り候ま、

御無沙汰仕居候。謝々。

不取敢御歡申上候。頓首

八月三十一日

田邊為三郎

喜多兄臺

梧下」

十四、大正八年七月二十八日付喜多貞吉宛田邊為三郎書簡

表書「市外瀧の川王子ノ西ケ原殿上ノ喜多貞吉様」

裏書「封ノ四谷須賀町二ノ田邊為三郎ノ七月二十八日」

本文

「拝啓昨夜ハ御

寵召涼風萬

斛之裏(うち)に御清

饌頂戴。雅龍

如雲。真に消暑

第一法(けみし)を(けみし)閱知り

愉快無限。不取

敢御禮申上候。頓首

七月二十八日

田邊為三郎

喜多兄臺

梧下」

十五、大正八年十二月二十五日付喜多貞吉宛田邊為三郎書簡

表書「市外瀧の川西ケ原殿上ノ喜多貞吉様ノ侍史」

裏書「封ノ四谷須賀町二ノ田邊為三郎ノ十二月二十五朝」

本文

「拝啓。歳路崢嶸

無餘日、別て御多

忙と奉察候。又、御

國産の美柑一箱

御恵与被下、昨日

拝接、早速に家族と

共に鼓舌風味仕候。

御芳情難有奉鳴

謝候。近日御歸

居候之由、路上之御

興會と共に故園御

團欒之情味可想。

御吟思嘸相動候

事と奉存候。拝見之

日相樂候。

書外ハ拜禮に付候。

不取敢布敷

行。頓首

十二月二十五日

爲三郎

橘園兄臺

梧下」

歳暮の挨拶として、喜多が碧堂に蜜柑を贈呈したことへの礼状である。先に見た浜口容所との関係といい、「御國産」の蜜柑といい、喜多橘園の郷里が紀州であったことが確実視せられる。帰郷したことで詩作の興を催し、秀吟の数々が出来たであろうとする文末がゆかしい。

十六、大正九年二月五日付喜多貞吉宛田邊碧堂書簡

表書「市外瀧の川西ヶ原殿上／喜多貞吉様／御臣」

裏書「封／四谷須賀町二／田邊為三郎／二月五夕」

本文

「拝啓。昨夜錦水

樓上にて得拜禮、喜

甚、慰甚、近來に

無き清興、不知

刻之移也。久須

見翁之禮度瀟

灑、富者儔人之

氣味寸毫も無く

文事を解し温

乎、藹乎、實に

可親可敬かゝる

紳翁に御紹介被下、

老兄之御厚意感

佩仕候。御禮書御

差上書候得共、尚御

逢候時、可然御致

聲之程奉願上候。

不取敢布謝

二月五日

爲三郎

喜多老兄

梧下

竹隱君と六石君と

の間柄に就て昨夜

初て聞込し一条は

竹隱君の為に六

石君に其寛恕を乞

ふだけの友誼を盡

さばやと昨夜來

思ひ立候得共。竹隱君

にトニカク謝罪せしめ

ねばならぬこと、ソレは

手昏位では埒明き

不申、面晤を要し候

と。一面には震源地

之岡山に近ひ兩派

出來（竹隱門下に於て）

面倒出來居候故小生

浮かと其渦中へ陥る

の危険あり（勢ひ竹

隱君へ岡山へ去レのことを

云ハネバナラヌカラ）友誼

上如何と思へども暫く

差し扣へ居るべきかと存候。

高見如何（竹隱君は

ナカ、忠告を容レヌ様儀故

一寸困リモノ也）

冒頭に喜多と共に財界人として名高い久須美雪堂を囲む宴に陪席したことについての謝辞がある。久須美が富豪にしては、人格円満なる紳士であったことを讀んでいる。目を惹くのは、追伸として書

かれていた高野竹隱と佐藤六石との対立とそれを和解せしめるため

に碧堂が苦慮している様である。竹隱と六石とはともに、森春濤、

槐南に師事し、碧堂とも同門のよしみがあったと察せられるが、門

下生を巻き込んでこの両漢詩人の軋轢に関しては今知る所がない

ので、他日の課題としたい。高野竹隱は、名古屋の人。諱は清雄。

別号修簫仙侶、白馬山人。経学の師は佐藤牧山。詩は森春濤に師事。

明治期最高の填詞作家であったことは、神田喜一郎博士の『日本に

おける中国文学Ⅱ』（二玄社）に詳しい。佐藤六石は越後の人。諱

は寛、字は公綽。元治元年（一八六四）生まれで、昭和二年（一九

二七）に没した。明治十五年に新潟日日新聞編集長を経て、上京、

皇典講習所に学び、明治二十三年から森槐南の主催する「星社」に

参加する。没後に編まれた漢詩集に『六石山房詩鈔』がある。

十七、大正九年二月十八日付喜多橋園宛田邊碧堂葉書（ペン書）

（本葉書は冒頭に前の二月五日付書簡にあつた久須美雪堂の招宴に

田辺が御礼に赴いていることに触れていて、引用の漢詩が次の二月

二十三日付書簡でもほぼ同文で再出しているので、葉書の消印は不

分明であるが、大正九年のものと判断すべきであろう。）

宛名「市外滝の川西ヶ原殿上／喜多貞吉様」

差出人「田邊為三郎／四谷須賀町／二月十八日／侍史」

本文（裏書）

「拜啓不相變時局の爲に御忙殺之御

様子御勤勞ハ可敬も嘸と御察申上候。小生

去日曜の朝風雪中久須美翁の家へ

礼に行き（雪日訪雪堂と云は面白申候と思ひ

付たので俄に興動し出行す）

満城風雪衣離披妻孥訝問

何所之遠尋雪堂老居士瓊柯

堆裡留我詩 高田級級瓊

作林仙人樓閣如何尋春寒

此日飛白雪冷然醒我梅花心

推敲未到。御教正是折。其翌朝

今痼疾のリヨウマチウス發作申候。小々發熱

静養中（昨日は起床可仕。熱は既に

退散痛も去り候）青厓先生は一月

以來一度も來臨無之諸處共一向に

見へぬ由旅行かと存候。神仙可接難か

御忙中有閑で御吟哦もアルベシ如何」

本葉書は冒頭に前の二月五日付書簡にあつた久須美雪堂の招宴に
対して、田辺がわざわざ雪の中を御礼に赴いていることに触れてい
て、引用の漢詩が次の二月二十三日付書簡でもほぼ同文で再出して
いるので、葉書の消印は不分明であるが、大正九年のものと判断す
べきであろう。

昔人は宴席に招待されると主催者にその礼状を認めるだけでは居

書画会の盛況に見る大正期漢詩人の雅交

たたまれず、わざわざ直接主催者自宅まで赴いて礼を述べていた。

年始回りも中元の挨拶も直接赴くのが普通であり、年賀状や物品の
みの贈呈では済まされなかった。ここで頑健ならぬ身体なのに、雪中
をわざわざ挨拶に出かけたことを碧堂は言うが、それも相手が「雪
堂」と号するので、御礼の漢詩に雪を詠じるという洒落心にかこつ
けるのだから、たいした漢詩人ぶりである。ところが歳には勝てず、
翌日からリユーマチを発症して寝込んだというのだから、詩文風流
も命がけである。

「推敲未だ到らず」とは述べているが、身命を賭しての碧堂の雪
中詠を左に掲げる。

満城風雪衣離披 満城の風雪 衣離披たり

妻孥訝問何所之 妻孥 訝つて問ふ 何の之きし所ぞ

遠尋雪堂老居士 遠く雪堂老居士を尋ねて

瓊柯堆裡留我詩 瓊柯堆裡に我が詩を留めたり

既に帰宅の後の詠と解した。出掛ける前に家族に雪中外出を訝ら
れたとも考えられる。町には雪が吹き荒れていて、衣裳に雪がこび
りついていたので、家族にいったいあなたこの悪天候の中どこへ
行っていたのと尋ねられたので、雪堂さんというご老人のお宅をわ
ざわざ訪ねて、雪に包まれた木々に囲まれたお屋敷に拙作を置いて
きたのだよ、といった内容。命がけで獲得したヒューモアが横溢す
る。第二首。

高田級級瓊作林 高田級々瓊林を作す

仙人樓閣如何尋 仙人の樓閣 如何ぞ尋ねん

春寒此日飛白雪 春寒此の日 白雪飛び

冷然醒我梅花心 冷然として我が梅花の心を醒まさん

こちらは人事から離れて雪景色を客観的に詠じる。久須美郎が高台の上であり、そこに達するための段々にも雪が積もっていたというのが第一句であろう。

十八、大正九年二月二十三日付喜多橋園宛田邊碧堂書簡

表書「麹町区丸之内有楽町／鐵道協會工業俱樂部／喜多貞吉様」

裏書「四谷須賀町二／田邊為三郎／二月二十三朝」

本文

「御多忙中御返事被下

謝々。春寒御健安珍

重候。雪日訪雪堂詩は

如左改稿仕候。

満衣風雪寒離披

衝風冒雪何所之

遠尋雪堂老居士

玉壺欲酌東坡詩

詩情應似無絃琴

彈而不聞少知音

春寒此日飛白雪

冷然醒我梅無心

尚推敲可仕候。多少先

日のより俗調を脱却し

得たるかと存候。十分に御

批正可被下候。

紀州にて那賀郡と申す

處は有田の方に近きか。

新宮に近きか電話にて

(御閑暇之時尊臺より番町

七四四へ御掛け被下度候。伏請)

御教へ被下度候。

寄題讀雪樓

山川靈徹玉玻璃

情似王維孟浩詩

積雪寒光明年夜

一樓高興讀書宜

御吟正可被下候。

書外は電話にて草々頓首

二月二十三朝

為三郎

橋園兄臺

梧下」

前の葉書から五日後に、碧堂は推敲の結果を橘園に示した。病を力めての雪中行であったのであるから、軽々には詠み捨てなかつた。まだ推敲を続けると言っているが、ここでの改案も左に掲げる。

満衣風雪寒離披 満衣の風雪寒離披たり

衝風冒雪何所之 風を衝いて雪を冒して 何の之く所ぞ

遠尋雪堂老居士 遠く雪堂老居士を尋ねて

玉壺欲酌東坡詩 玉壺に酬みんと欲す 東坡の詩を

詩情應似無絃琴 詩情 応に無絃琴に似るべし

彈而不聞少知音 弾ずれども聞かれず 知音少れなり

春寒此日飛白雪 春寒此の日 白雪飛び

冷然醒我梅無心 冷然として我を醒まさしむるも梅に心無し

第一首は家族との問答体という趣向を却下して、碧堂の自問自答体とした。そのことでヒューモアは減殺されたが、元佑六年（一一〇九一）に賦した「聚星堂雪」という長篇の雪の詩で有名な蘇軾に自らを擬して「玉壺」＝美酒でもてなしてくれた雪堂に詩を呈して御礼を述べようと詠じるのであろう。

第二首は前案とがらりと構成を変えている。久須美への謝意がかりき消されて、理解されることが稀なる表現者の孤独が詠じられている。結句で詠じられた梅も前案では醒まされて花が開きそうであったのに、碧堂がはっとしても梅は目覚めぬまま花を開こうともし

ないとするのであろう。

この後碧堂は喜多に那賀郡の所在を尋ねていて、喜多が紀州の人であることを再確信させる。最後にもう一首漢詩を呈し、批正を橘園に乞うて碧堂は筆を擱いた。

寄題讀雪樓

山川靈徹玉玻璃 山川靈徹 玉玻璃

情似王維孟浩詩 情は王維孟浩の詩に似たり

積雪寒光明年夜 積雪寒光 明年の夜

一樓高興讀書宜 一樓の高興 書を読むに宜し

右の詩も雪堂邸を訪うた時の感慨を詠じたものであろう。白い宝石のような雪で覆われた大自然（＝「山川」）は心あるものごとくで、わたし（＝「碧堂」）の心はあたかも唐の王維・孟浩然のごとくである。王維には「雪中芭蕉」（『夢溪筆談』）の故事があり、孟浩然には「雪中騎驢」（『本事詩』）の故事がある。ふりつもった雪明りが夜を照らすので、楼内の書齋では清興を楽しみ本が楽しく読めるといった内容である。

（追記）

文中、随処に掲出した碧堂の書簡の写真はすべて早稲田大学大学院文学研究科生藤富史花氏の撮影に係る。記して謝意を表す。また、喜多橘園の生年と『東山莊唱和集』のことに關しては、久喜市の堀内謙一氏のご示教に接した。ご厚意の段、これまた記して謝意を申し上げる。

本稿は科学研究費補助金挑戦的研究（萌芽）「近世から近代にかけての日本の書簡文の研究」（課題番号17K18493）の成果の一部である。